

65

60

55

50

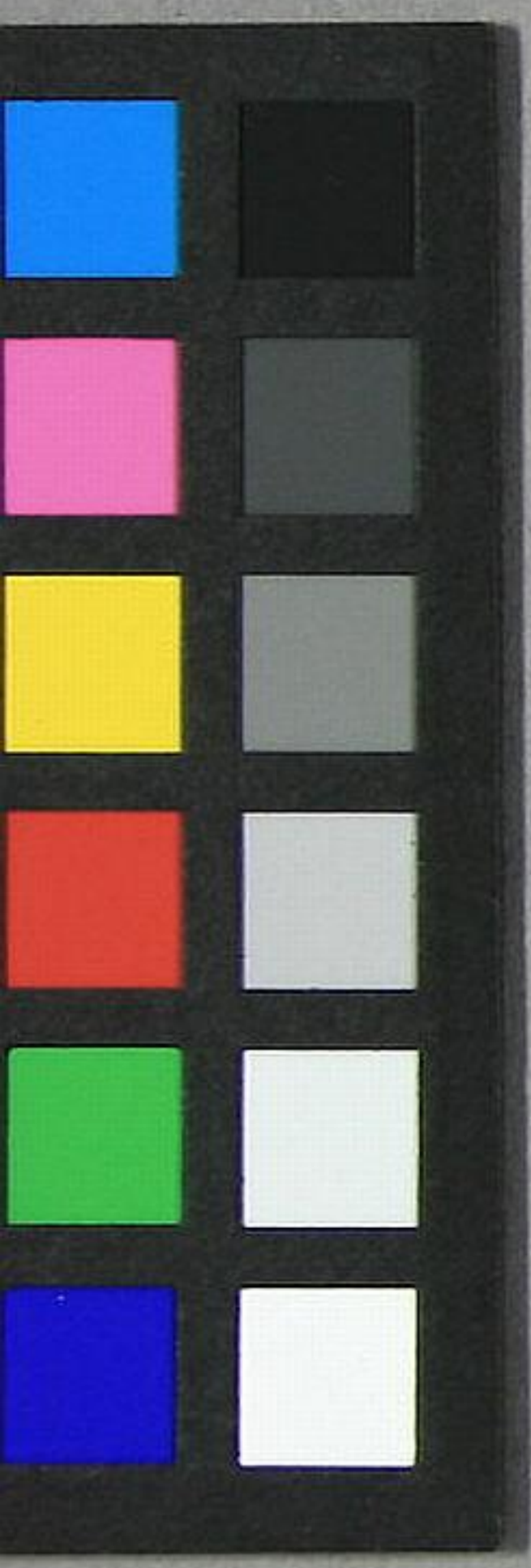
泉亭  
櫻齋  
長種  
画作



鼠  
子  
真  
聞  
弟  
二  
編



延壽堂  
梓





鼠襖狎真聞編二

上卷

A480  
2

48-8735

白風 稜 神 其 園

新編 上之卷

泉庵亭

是正著

接斎

房種画

延壽堂梓



予初編の巻より徒書ひたすら著せし鼠小僧ねずこぞうと眞傳まへんの二編ふたひらに至急いたまひ  
 綴つづもよと書舗かきや々の注文ちゆうもんとオツト承知うけちと請合うかがひ作者さくしやの鼠小僧ねずこぞう  
 因よる何なにでも引込ひきこむ慾よくの面暑おもげきを知らしらぬ冬の夜ふゆのよの長ながきも忘わす  
 る好このむ道鼠みちねずと朋友ともの終夜しゆうや人の寝ねる目めとコソリと机つくえの上うへの夜稼よるせま  
 小駒ここまが鼠ねずの細々こまごまとポツク綴つづるも古ふるへの故人こじんが文ぶんと盗ぬすと取る是こゝも  
 どうやら切技きりぎ学文がくぶん繩目じゆめの耻はぢより辱はぢしぬ拙つた筆ひしの罪つみとも免ゆるされ  
 地獄ぢごく落おしの御料ごりやうめりく出版しゅつぱん時日ときひの其日そのひより鼠算ねずざん小異こゝろら  
 む日増ひまし小御求こみとめ殖うゑるや御注ごちゆうと願ねがふ而已のみ

明治十三年早春

泉庵亭是正識



栗田家の息女  
花琴姫



盗賊の首領  
鼠小僧次郎太夫



鼠棧甲子真聞二編

毒び終との酒は元父の覚悟を  
 極め血の流石を煮くおろし  
 不意なくも一個の嘉傑は引留  
 らしむる人となしどりのみど  
 嘉傑めしも殺さばしと川をさ  
 ぎるここと十歩をうろ老翁も今  
 死ぬるは死むは且平津辺の方へ引留  
 まし面用もくぞえたるを嘉傑もま  
 かり我今も有私用なりてるの介ふ  
 夜と更し一巻くともうふもろくは  
 まのこが響きよるふつひをる者  
 形まてふ死を極むるはめらるらん

迷ひしふもゆるまはあり一葉ふゆの  
 不後とあ人の数前より本後で使らる  
 者の續きんをまのこをまのこ

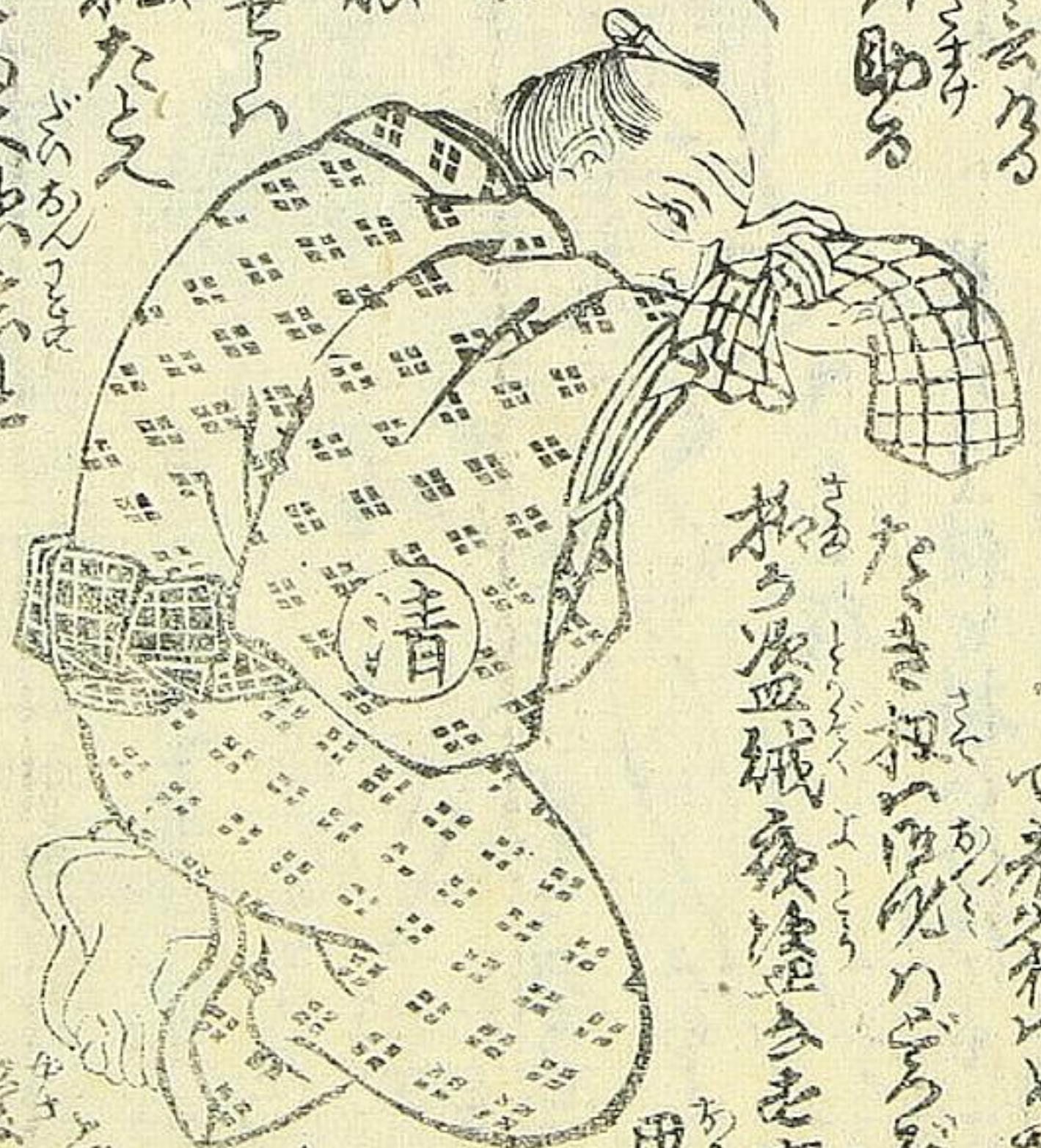
古まへあるをまのこをまのこ  
 とをまのこをまのこをまのこ  
 悪のる者今死ぬる命をな命を  
 古まのこをまのこをまのこ  
 まのこの忠告もまのこのまのこ  
 且一をまのこのまのこのまのこ  
 初る孫どの夢の我も懐中  
 初合せの命もまのこのまのこ  
 まのこのまのこのまのこのまのこ  
 と送るまのこをまのこのまのこ

鼠棧甲子

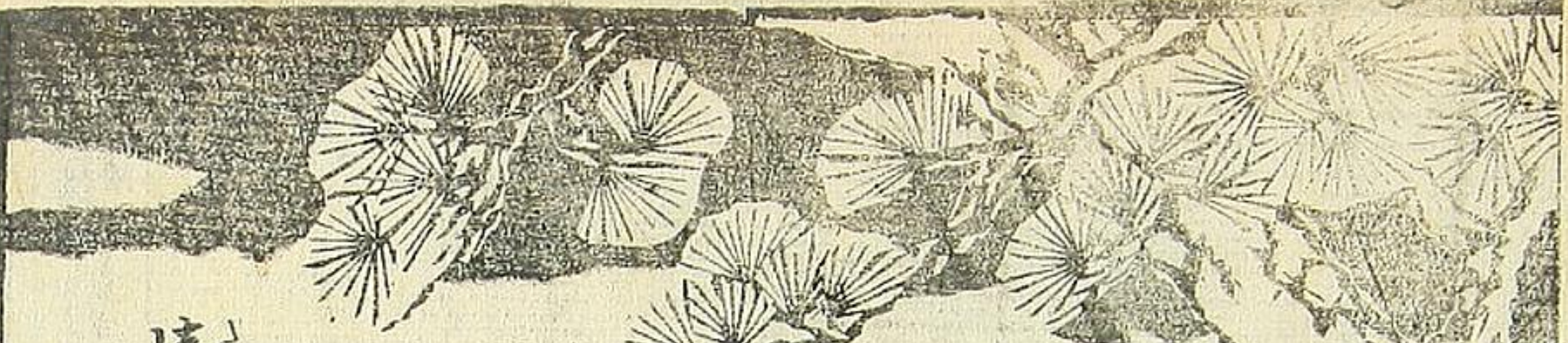
二



此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる  
 此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる



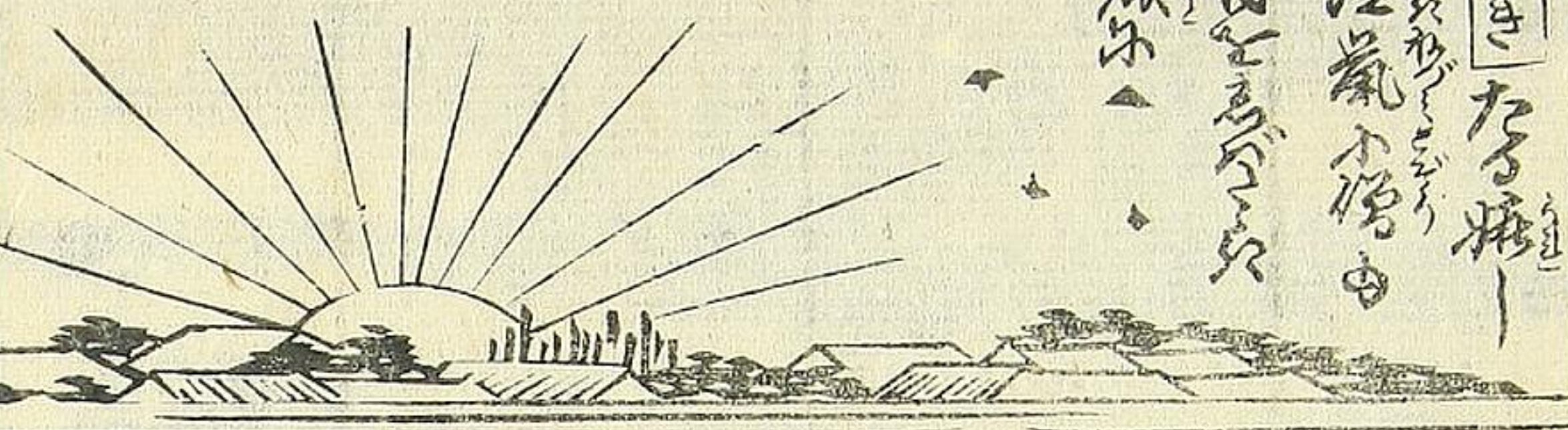
此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる  
 此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる



此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる  
 此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる

此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる  
 此頃より礼の言葉もきく様  
 涙のうらみもあつて身あつてさるる  
 老翁のうらみもあつて身あつてさるる

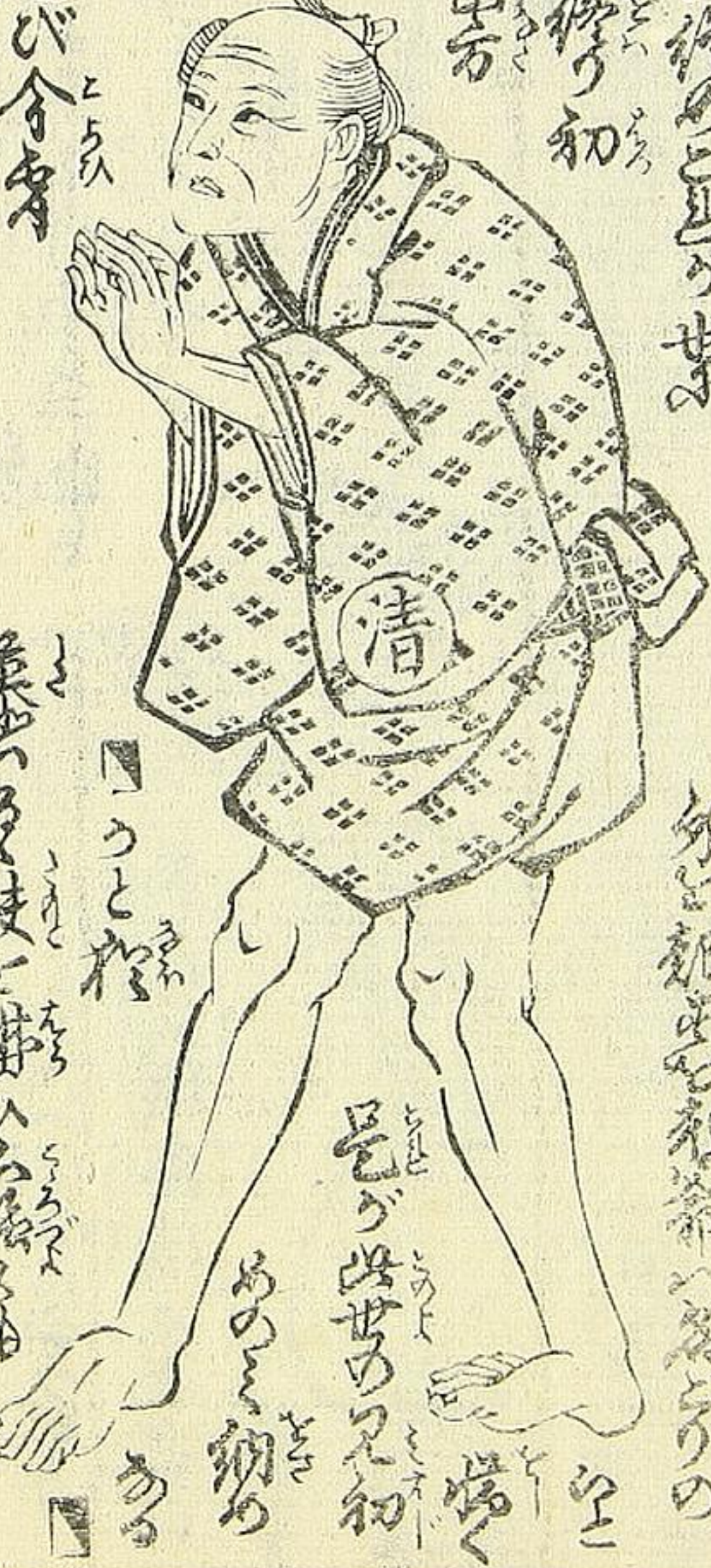
**つぎ** たる癒  
泣氣下湧中  
目をみるが  
涙



公の世を迷はせぬ  
おの矢の矢免しき刀の  
癒とみるのふ人  
初めを見えきまはる初め  
あひゆるりして世  
ゆるり初  
ゆるり

ふらふらとまはる初  
あひゆるりして世  
ゆるり初  
ゆるり

我よりす志のゆるりの  
癒とみる初  
ゆるり



葉のくやくと掛ひる  
嵐小舟とてよく後落る  
新の世をよほる世のうね

みぞ  
かみ  
世のあら  
死に願ふ  
あきら  
ゆるり



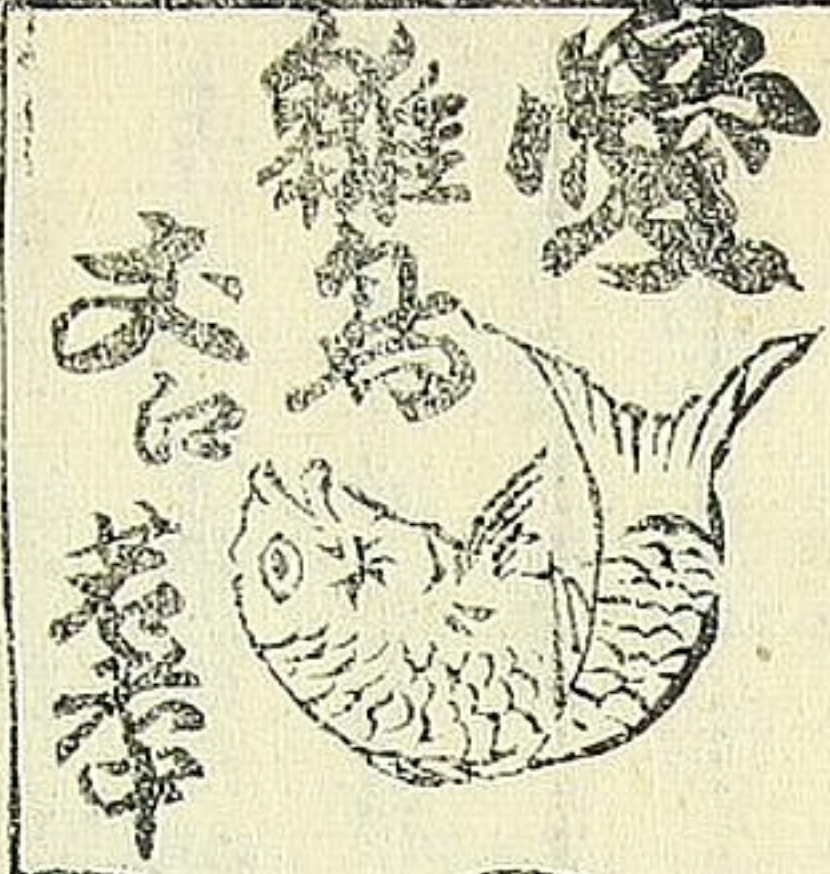
春目とゆるり  
あきら  
ゆるり



あきら  
ゆるり  
あきら  
ゆるり  
あきら  
ゆるり  
あきら  
ゆるり  
あきら  
ゆるり  
あきら  
ゆるり

盛龍百病

雑名女は海の  
 雑名が娘明石七重を女房小娘と託のを名と選り  
 各と持せまのわらわ尻もあらけじと名を名馬あり  
 今の子を一人を思ふ女房との不首  
 一の子を今年はとまりたるを脱とて  
 今の子を一人を思ふ女房との不首



愛  
 雑名  
 大台  
 若草

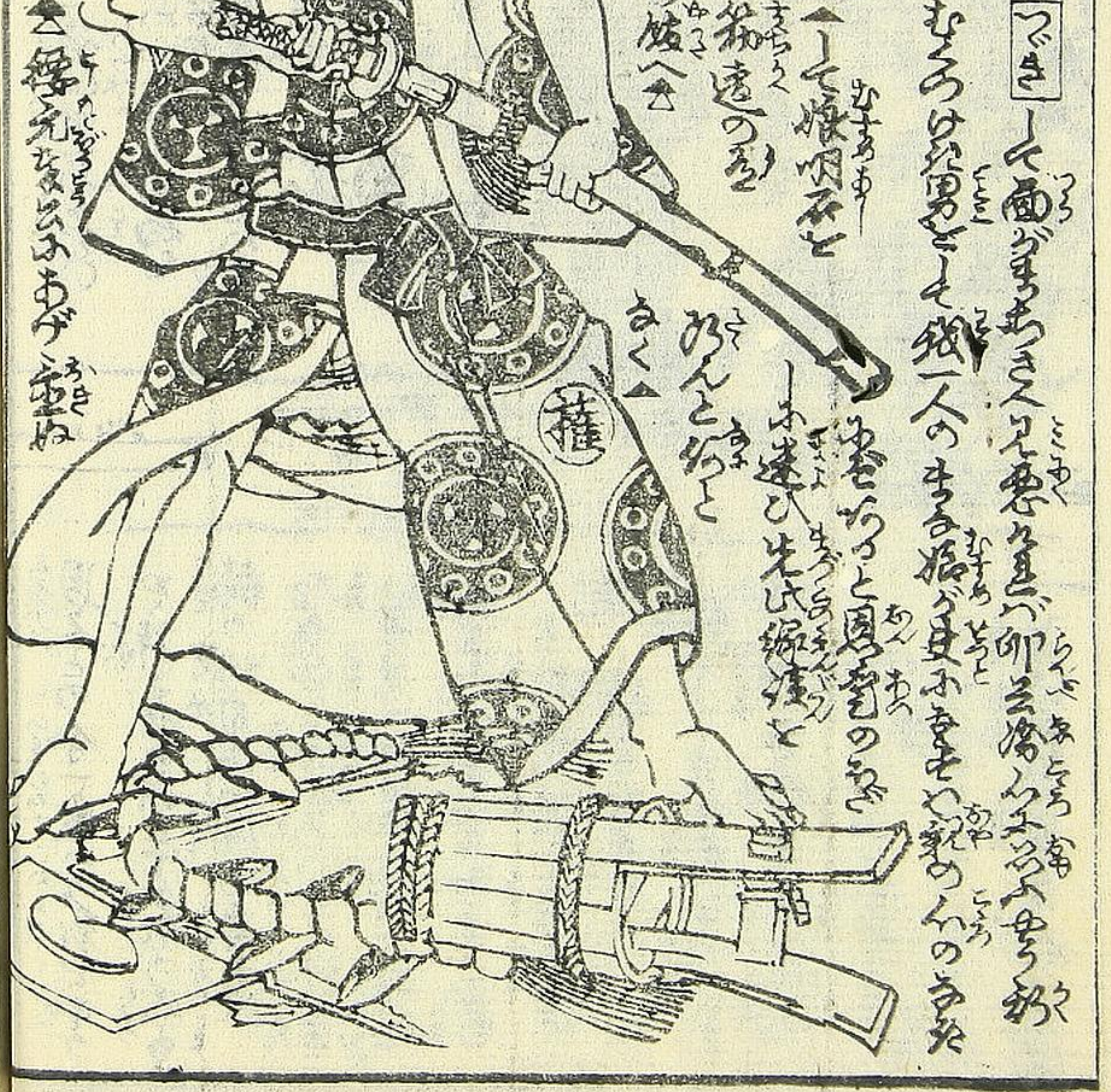


愛  
 雑名  
 大台  
 若草



北を  
 奥んと  
 与り  
 雑名  
 と背ふ  
 ろう終ふ  
 その際と  
 引か

帯地  
 五毒  
 五節  
 五節  
 五節



つま一々面がまあまらと悪き道に卯三流らまらあやう  
 なるけは男とて一人のまら流らまらあやう  
 一々面がまあまらと悪き道に卯三流らまらあやう  
 なるけは男とて一人のまら流らまらあやう

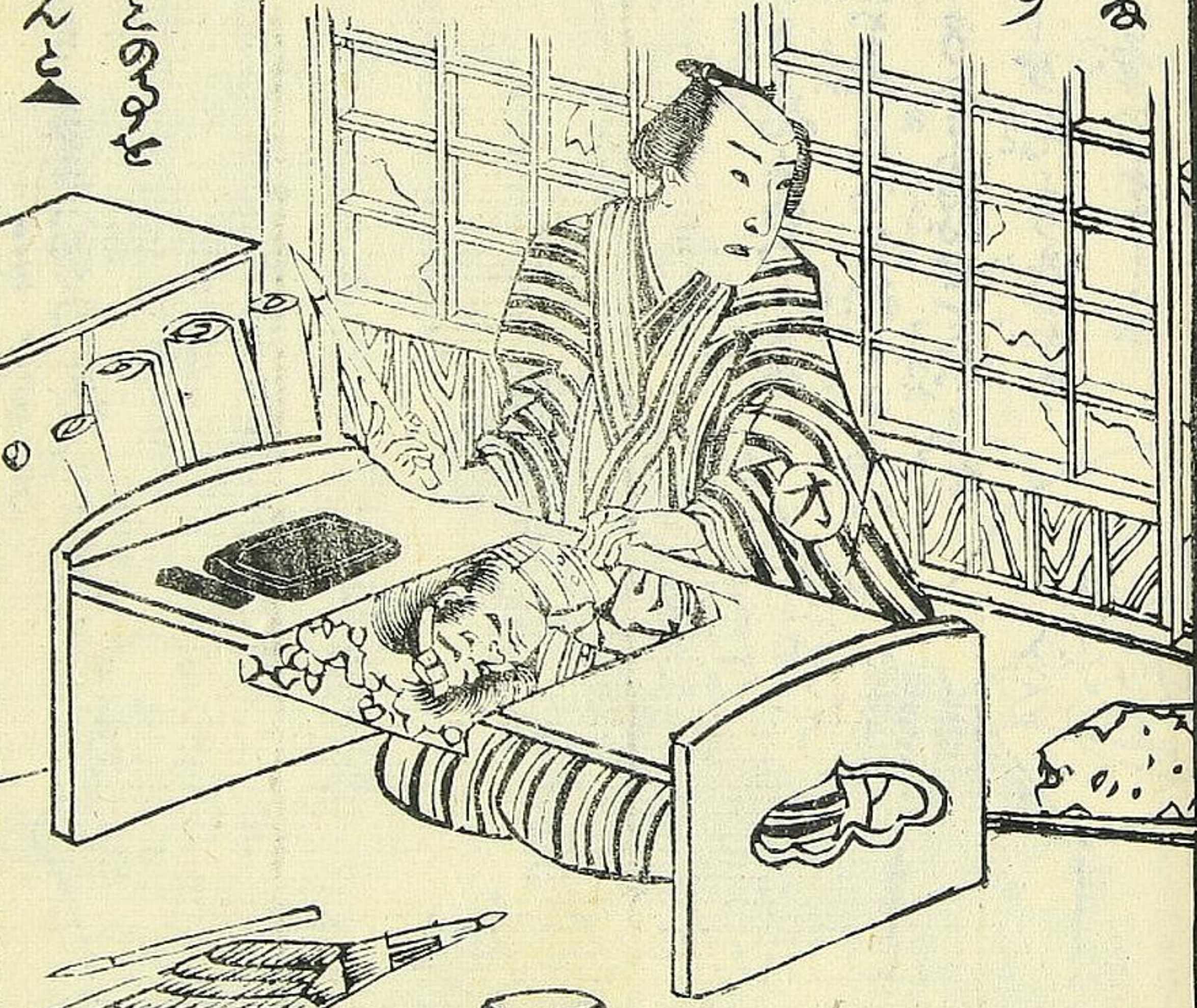


つぎ後者を為茶のそりお大ひる金曜と云ふ  
 とも、おへ離るつらうともを衣底を履くも後  
 ても後のお條は靴のあつを隔てて一歩離るる  
 お条と云ふ波明石を喉店へ送るるも  
 もくろ老との後と紫と女想やうお條の  
 前小僧と有笑の飯お送る一が波明石が親  
 置より便りのぬきと云ふよりの  
 おまごころと流石と笑へませぬ  
 のはくまを教ゆがうおののの  
 後程お条がうららうおののの  
 うらららふへん今更お  
 我必と云ふ下のひ知  
 うねあふと持そらうと云



向ふ親お相お  
 ともおと云ふ  
 おう除お杖と云ふ  
 おふんも靴お出  
 のさやま入おのるも  
 全お  
 ともお  
 くはひ  
 のお  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの

お條の父と云ふ  
 おとと云ふと云ふ  
 外へつむ結  
 の魚海と云ふ  
 たる灯火と云ふ  
 もたぬげお格  
 ともおがえへこのの  
 奏て一茶おらまんと



み服の  
 内を  
 びん  
 と云ふ  
 ともお  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの  
 おの

今更人の死と一まき(男)の死(女)の死

と為(速)くを(武)も(家)の(様)と(様)と(自)

の(周)の(敷)した(も)隙(を)伺(ひ)諸(君)も(有)家の(隙)

と(為)び(為)び(石)と(連)と(女)と(男)と(徳)世(と)其(女)の(の)

母(が)固(不)便(り)と(求)め(一)文(政)年(の)

の(事)と(知)る(一)輪(中)文(政)年(の)

改(元)末(と)文(保)元(年)と(あり)ぬ(妻)の

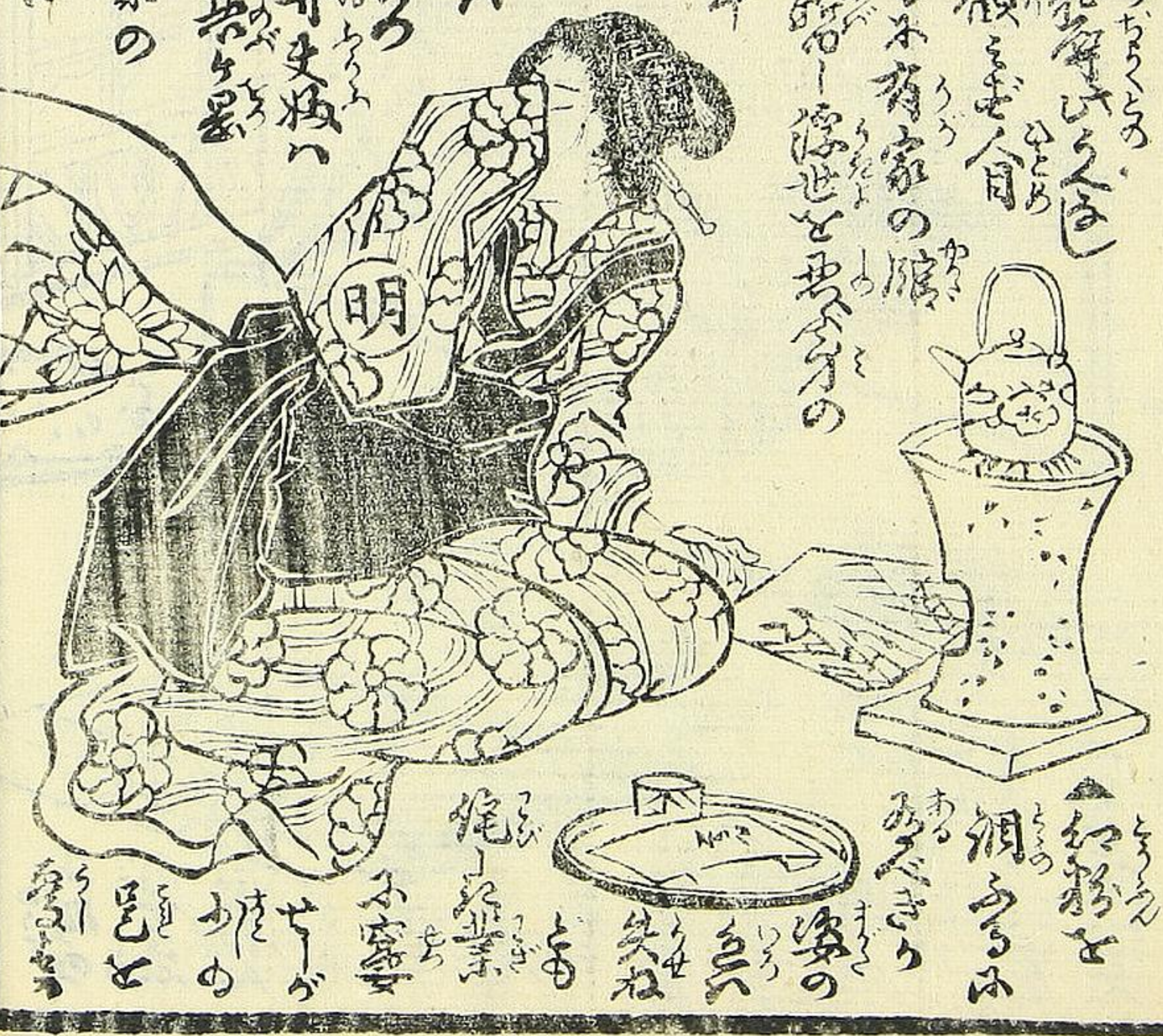
末(心)も(と)極(嘆)ぬ(き)者(ゆ)り(つ)ら(り)

ろ(ひ)て(其)の(有)果(を)表(さ)さ(る)花(弁)女(梅)の

仮(初)の(日)び(住)居(より)今(不)潔(せ)と(其)と(墨)

小(丈)梅(僅)不(さ)る(せ)が(元)より(武)家の

活(業)も(一)か(ら)寄(り)の(ま)ま(に)小



紅粉を

潤らす

あまきり

湯の

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

紙(の)の(後)と(し)馬(の)の(町)へ(通)り

一(が)元(より)聖(二)の(世)業(ま)ま(に)

明(の)も(り)の(隙)と(り)の(付)の(事)の

業(と)助(け)ん(と)候(り)の(事)の

の(徳)具(と)と(な)女(梅)の(り)

とも(様)け(と)ま(ま)ら(ぬ)世

第(の)世(に)一(と)明(の)の

者(の)姿(不)久(後)

と(あ)ら(る)隙(も)あ(り)

と(い)ふ(舟)の(水)張

と(い)ふ(と)新(様)の(心)

と(い)ふ(と)も(空)渡

と(い)ふ(と)風(浪)の(り)る(り)



と(い)ふ(と)と(連)海(の)の(と)と(海)

と(い)ふ(と)と(月)と(夜)と

と(い)ふ(と)と(重)ね(と)か(た)と(り)

と(い)ふ(と)と(墨)の(若)者(梅)り

と(い)ふ(と)と(と)ん(と)と(と)と(と)

と(い)ふ(と)と(月)の(影)と(と)

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

と(い)ふ(と)と(と)と(と)と(と)と

くちあいの  
もあつな  
はの細さの限  
りもきつ明  
はの甘平と願  
葉の優れ物  
徳の物徳物  
徳木の箱入  
先より金おの  
久まけも合  
此にお終り  
美か入  
のふ



と色お徳の  
初葉の  
くは徳徳  
はの甘平と願  
葉の優れ物  
徳の物徳物  
徳木の箱入  
先より金おの  
久まけも合  
此にお終り  
美か入  
のふ

袖も毒代  
はるの秋  
の礼多  
踊り  
電の電  
をた表れ  
身のこころ  
其の眼病  
この表れ  
ふのの  
とあひら  
あつな



て世と徳  
清  
この表  
ふのの  
とあひら  
あつな

【き】 紅繩のあつ子持子 紅繩毒眼病療治所  
といと墨墨墨々 看取あつ一僕つとぬ 招死  
西者 病家いとららふをうぬ 折りふ小  
笑ろりーとむる人をも物  
物とばあじい

△去せしとあをい  
直より他の病療  
とあふは  
△



紅繩のあつ  
あつ子の眼病を物療り  
うちあつてとせとぬ 紅繩  
お前とちあつてとぬ 紅繩

△使の方とよとさきよ  
その借妻細ゆちとあつとあふ  
送らんと早くあつてあふ

小倉山 昔日日新話 五 泉竜亭是正作  
青樹榮 編 櫻齋房種画

白縫物譚 豊國  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

算法教授書 全  
泉竜亭是正作

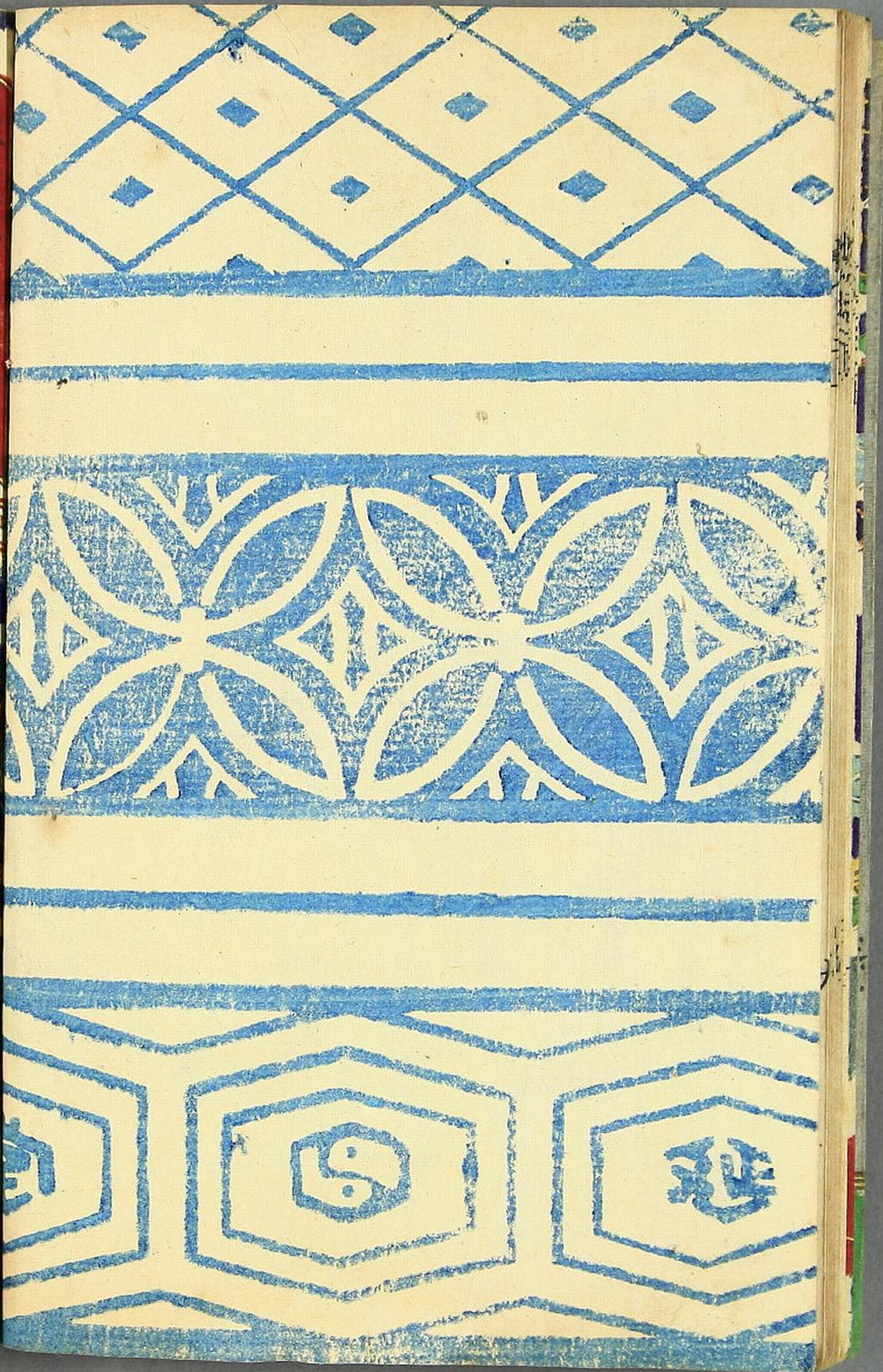
鼠袂甲子真聞編 三 泉竜亭是正作  
櫻齋房種画

人民必携交際義務 同  
泉竜亭是正作

延壽百人一首 全  
泉竜亭是正作

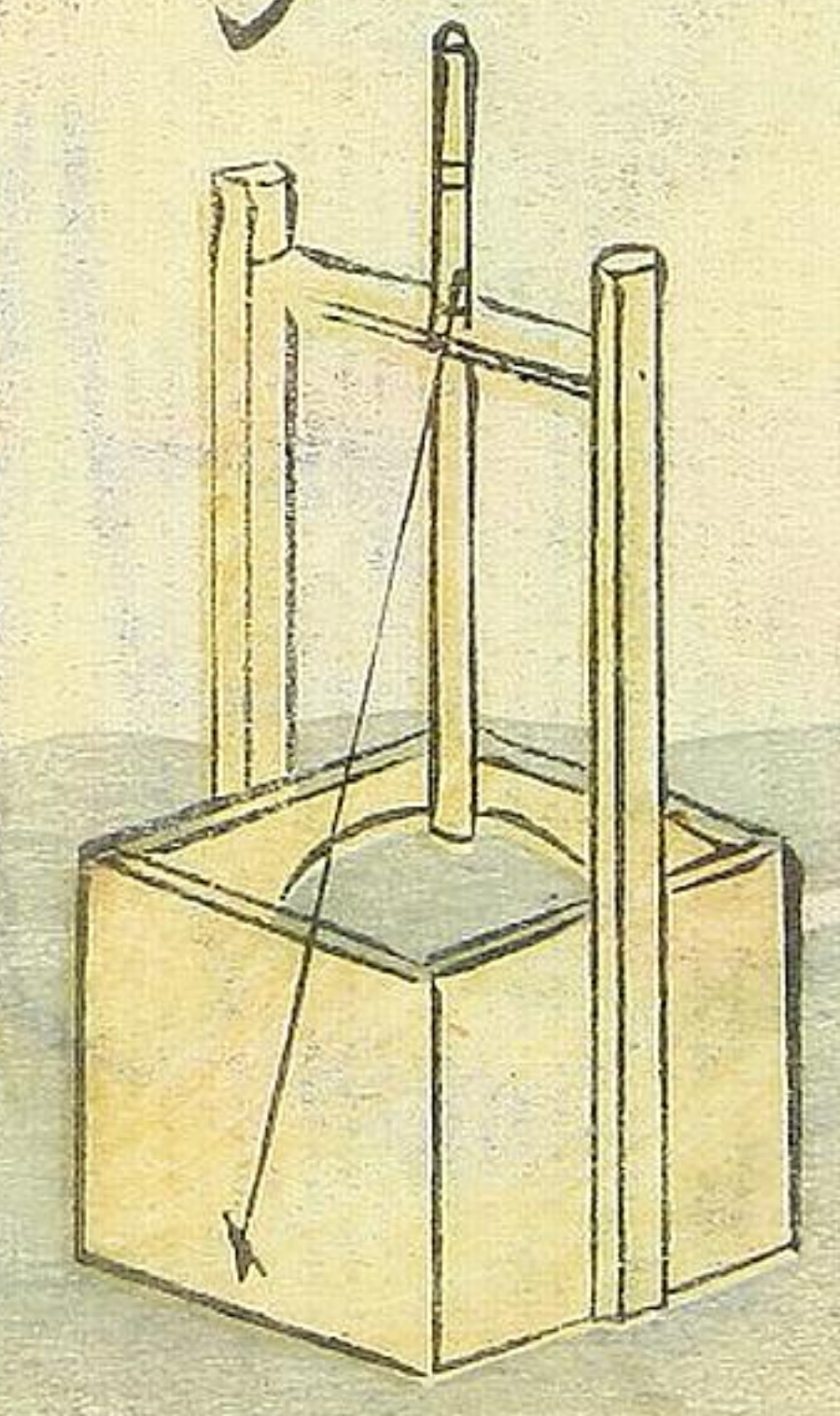
大日本海陸全圖 銅版全  
泉竜亭是正作

地本錦繪問屋 東京日本橋通三丁目十二番地  
延壽堂 林九屋鉄次郎版元



あづみ びんごし  
**氣 祿**  
 きのね んごん  
**彈 志 守**

或 編 中 三 卷



泉 鏡 子 是 正 著  
 操 舟 房 種 畫

延 壽 堂 梓

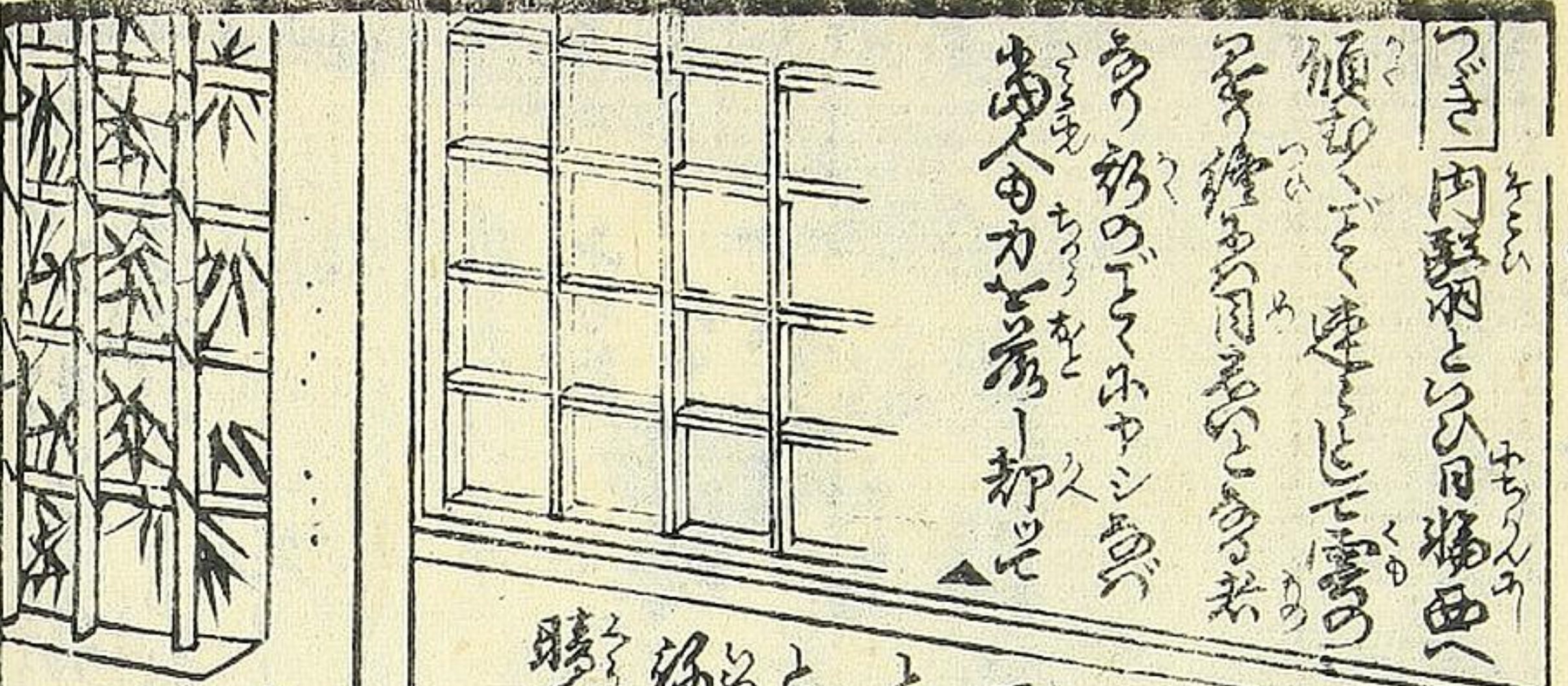
夫の明石の眼病を治すに...  
 病の種を問ふに又兼...  
 家の星をふられけり...  
 宿病を明石の...  
 中う初め御...  
 此の毒を...  
 夫の目の病を治すに...  
 小根...  
 小根...  
 小根...  
 小根...

あづみ びんごし

つぎ内膳とりの日場也  
 頼むらう連はとく雲の  
 多餘も同業と多老  
 あり初のうみヤシ  
 商人ゆ力とあり却て

病の障のり  
 病はもとれ癒さ  
 作は...  
 病しと...  
 愛は...  
 と...  
 勝

○我...  
 の外...  
 今...  
 服病の  
 明  
 され...  
 老...  
 金...  
 食...  
 と...



大...  
 う...  
 聖...  
 花...  
 花...  
 花...  
 花...

紅  
 療...  
 と...  
 療...  
 と...  
 と...  
 と...  
 と...  
 と...  
 と...  
 と...  
 と...

舌のあざのりしと其莞尔  
 と幾ひ膝まをのりて其の  
 身と腕のせりけりせむのり  
 舌への舌のせりけりせむのり  
 らぬ舌のせりけりせむのり  
 とのりて其の舌のせりけり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり



舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり

治 考  
 治 考  
 治 考  
 治 考



舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり

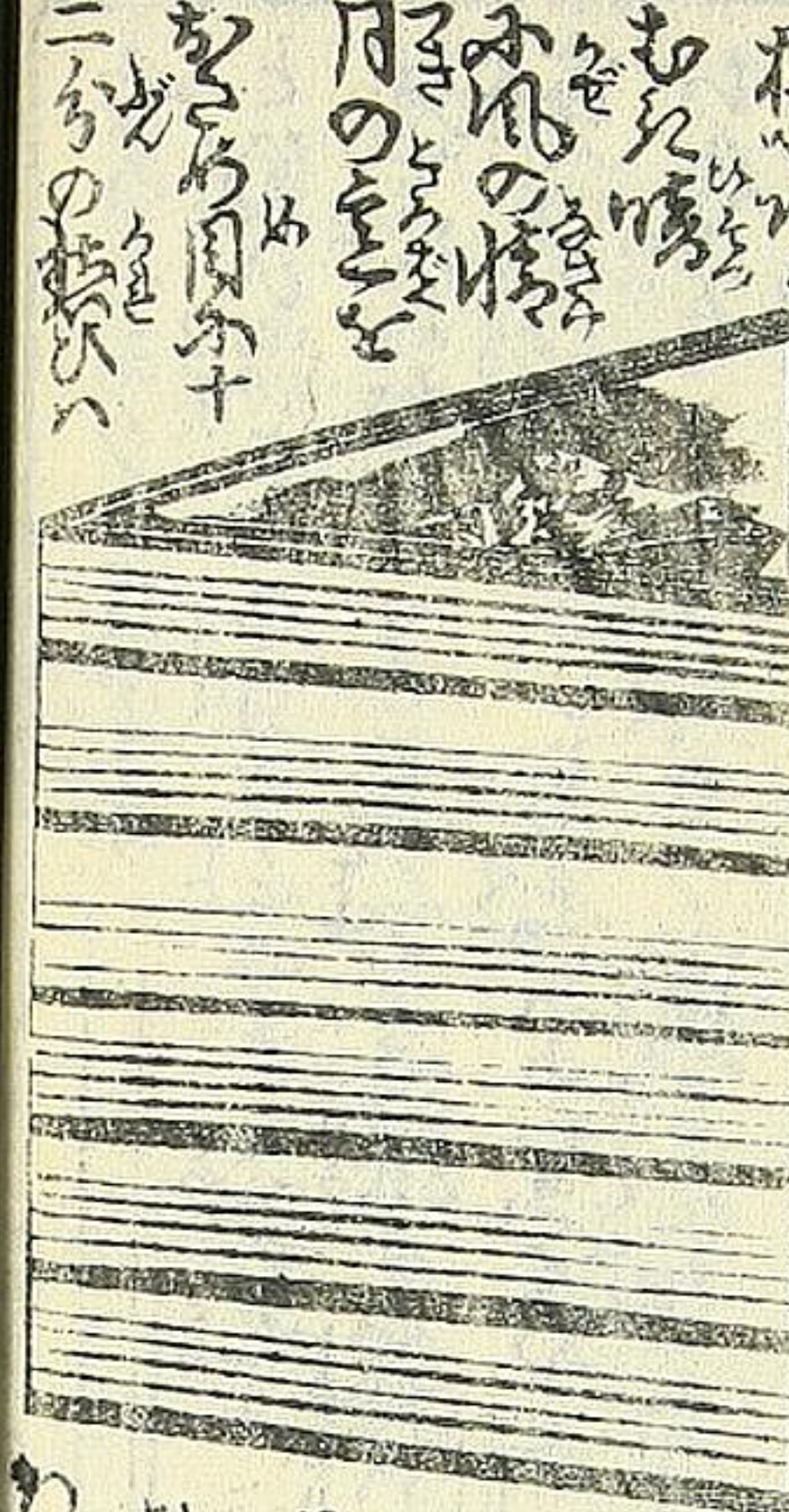
つまは身と膝へ沈んであり  
 とのりて其の舌のせりけり

〇せふ自らとてふ  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり  
 舌のせりけりせむのり



あはれなる人愛ふはつらえと念ふも  
あはれなる人愛ふはつらえと念ふも

あはれなる人愛ふはつらえと念ふも  
あはれなる人愛ふはつらえと念ふも

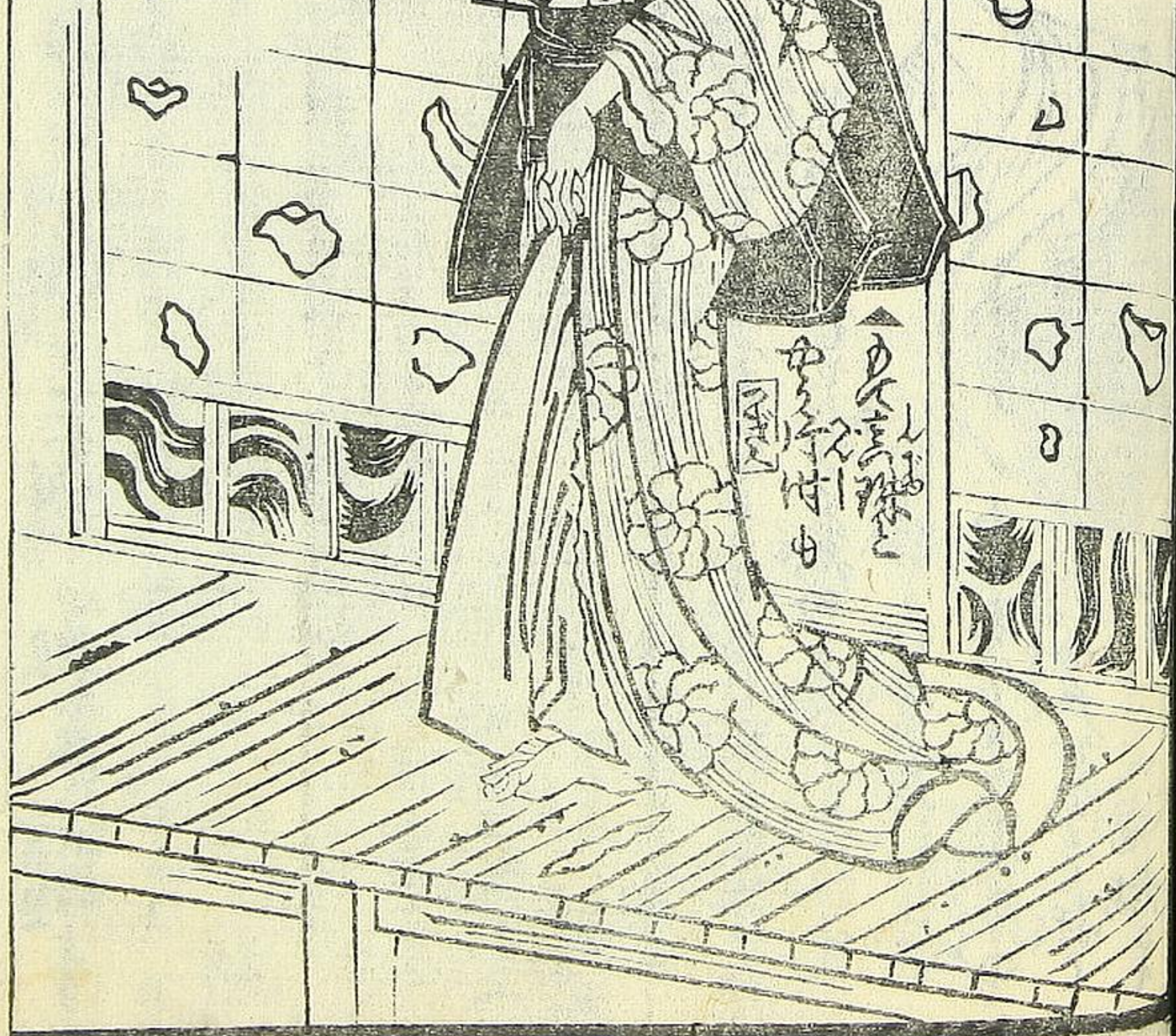


あはれなる人愛ふはつらえと念ふも  
あはれなる人愛ふはつらえと念ふも

あはれなる人愛ふはつらえと念ふも

あはれなる人愛ふはつらえと念ふも  
あはれなる人愛ふはつらえと念ふも

あはれなる人愛ふはつらえと念ふも  
あはれなる人愛ふはつらえと念ふも



あはれなる人愛ふはつらえと念ふも  
あはれなる人愛ふはつらえと念ふも





つきまはるの月  
 あまのしるしを  
 必しとぞ見る  
 しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅  
 必しとぞ見る  
 しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

月のあまのしるしを  
 必しとぞ見る  
 しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

必しとぞ見る  
 しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

片附  
 御離  
 看病  
 紅

御離  
 看病  
 紅

看病  
 紅

紅



つきまはるの月  
 あまのしるしを  
 必しとぞ見る  
 しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

必しとぞ見る  
 しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

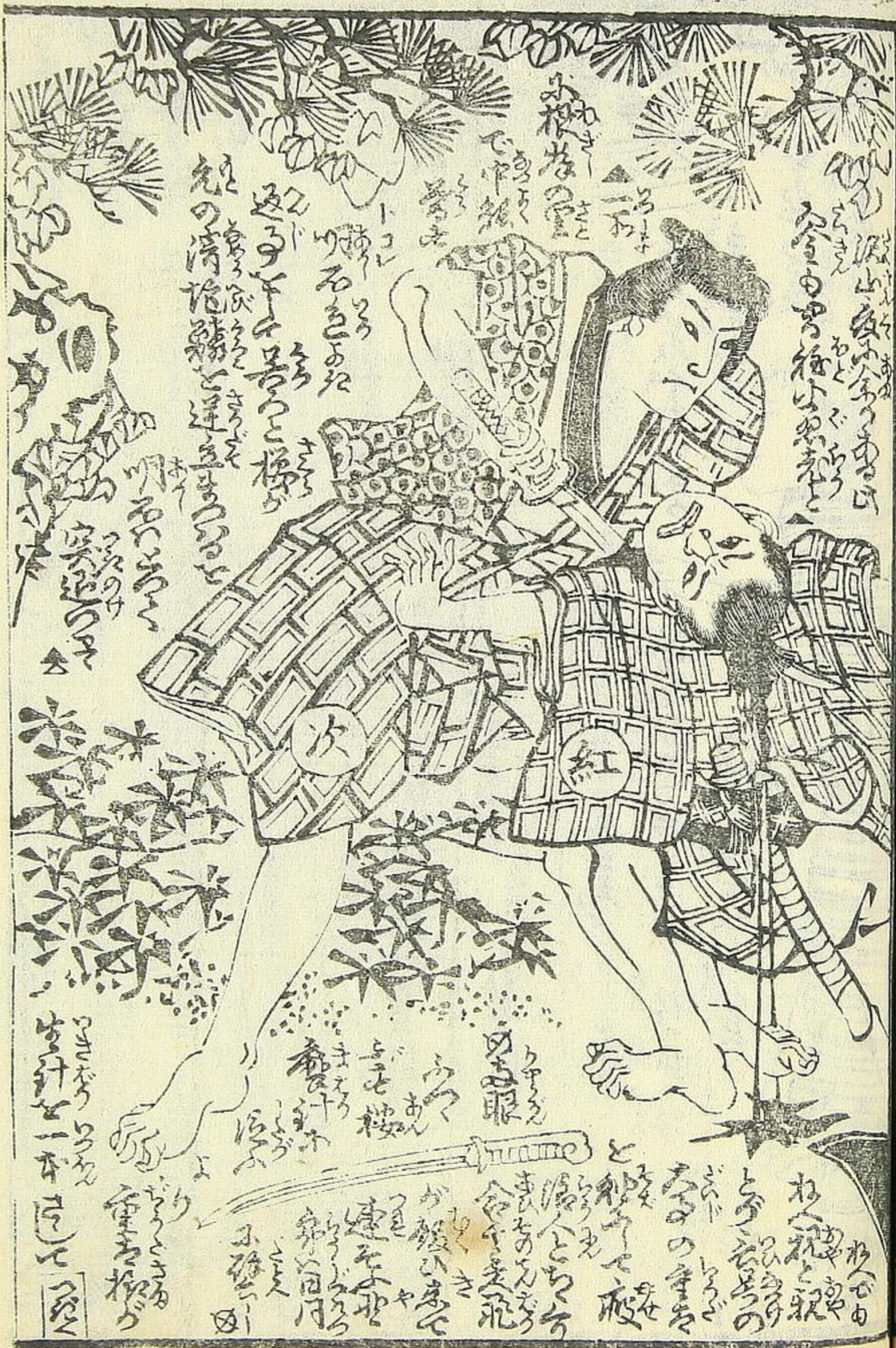
しのぎ  
 片附  
 御離  
 看病  
 紅

片附  
 御離  
 看病  
 紅

御離  
 看病  
 紅

看病  
 紅

紅

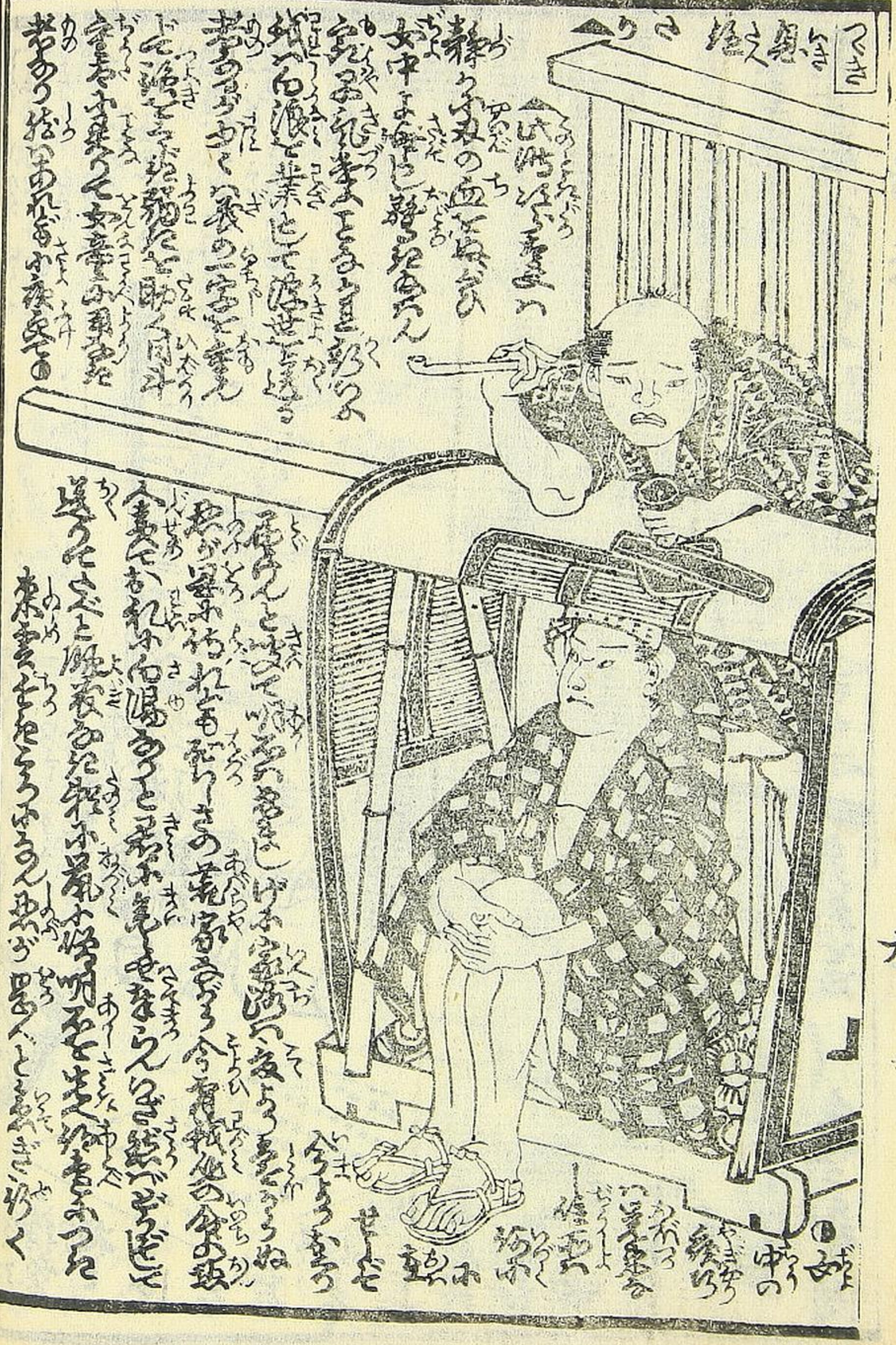


小松の葉  
 松葉の香  
 松葉の影  
 松葉の光  
 松葉の露  
 松葉の雪  
 松葉の雨  
 松葉の風  
 松葉の月  
 松葉の星  
 松葉の雲  
 松葉の霞  
 松葉の霧  
 松葉の煙  
 松葉の塵  
 松葉の土  
 松葉の石  
 松葉の木  
 松葉の草  
 松葉の花  
 松葉の果  
 松葉の實  
 松葉の種  
 松葉の根  
 松葉の幹  
 松葉の枝  
 松葉の葉  
 松葉の脈  
 松葉の理  
 松葉の氣  
 松葉の血  
 松葉の精  
 松葉の神  
 松葉の魂  
 松葉の魄  
 松葉の魄  
 松葉の魄

松葉の香  
 松葉の影  
 松葉の光  
 松葉の露  
 松葉の雪  
 松葉の雨  
 松葉の風  
 松葉の月  
 松葉の星  
 松葉の雲  
 松葉の霞  
 松葉の霧  
 松葉の煙  
 松葉の塵  
 松葉の土  
 松葉の石  
 松葉の木  
 松葉の草  
 松葉の花  
 松葉の果  
 松葉の實  
 松葉の種  
 松葉の根  
 松葉の幹  
 松葉の枝  
 松葉の葉  
 松葉の脈  
 松葉の理  
 松葉の氣  
 松葉の血  
 松葉の精  
 松葉の神  
 松葉の魂  
 松葉の魄  
 松葉の魄  
 松葉の魄







静かな夜の静けさ  
 女中も静かに寝てゐる  
 静かな夜の静けさ  
 女中も静かに寝てゐる

静かな夜の静けさ  
 女中も静かに寝てゐる  
 静かな夜の静けさ  
 女中も静かに寝てゐる

小倉山 昔日新話 編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

算法教授書 全

鼠裱甲子真聞編 三 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

人民必携交際義務 同

延壽百人一首 全

大日本海陸全圖 銅版 全

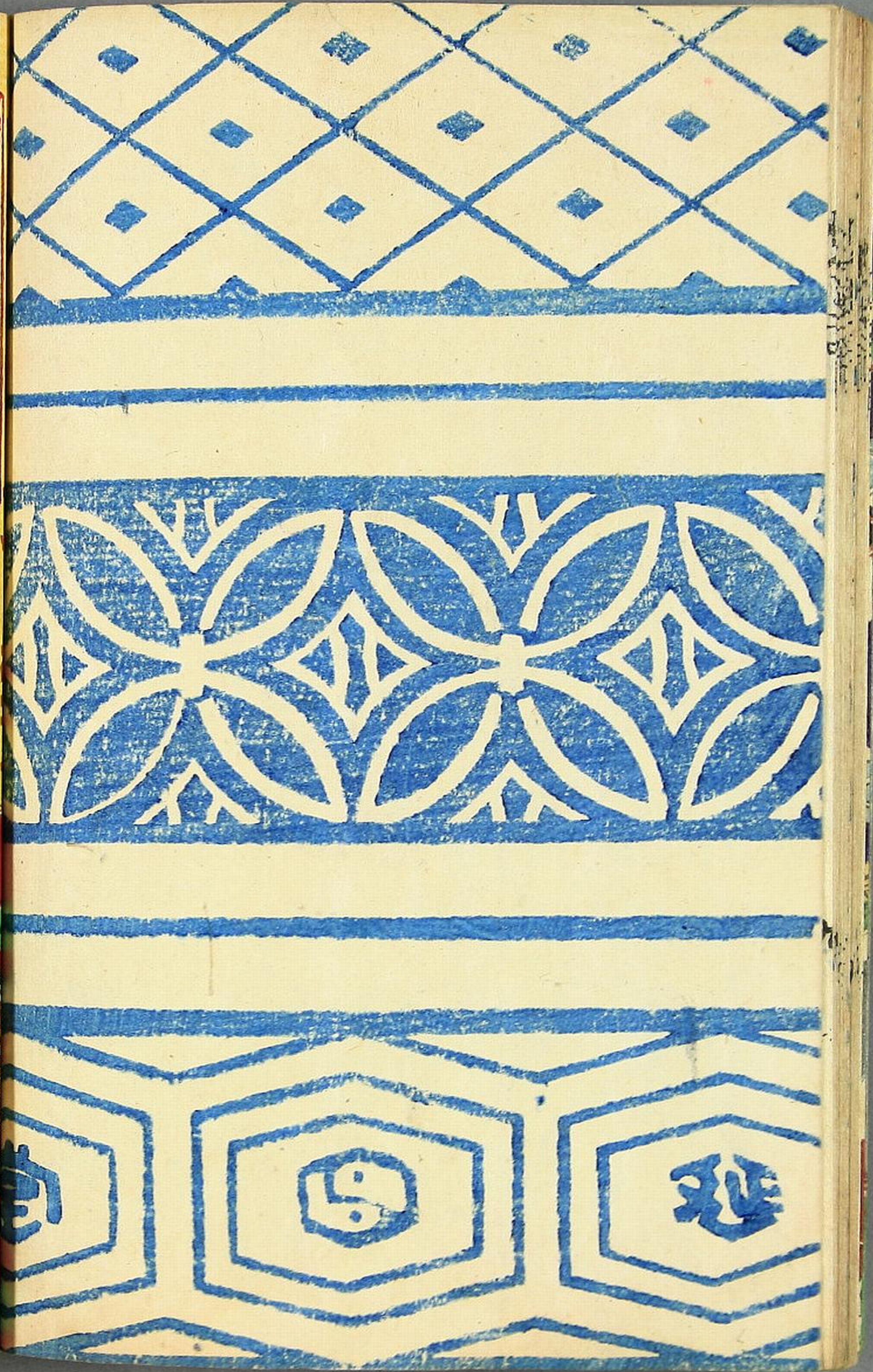
地本錦繪問屋 東京日本橋通三丁目十二番地 延壽堂 林小丸 屋鉄次郎版元

白縫物譚 豊國 画

皆さしはなれの若菜花物語  
 故人種負稿種彦作  
 永板菊壽堂主人古今  
 日之新聞社にて後編と  
 出版するの概なりを依て  
 月氏にて抄本より一層  
 善人引つた後校を看察方  
 陸續に宋とて伏て希ふ  
 二十四編出版 板元版白



櫻齋房種書





根津神社

茶、祿

押、志、守

氣、屋、ん

下、此、巻

是、正、著

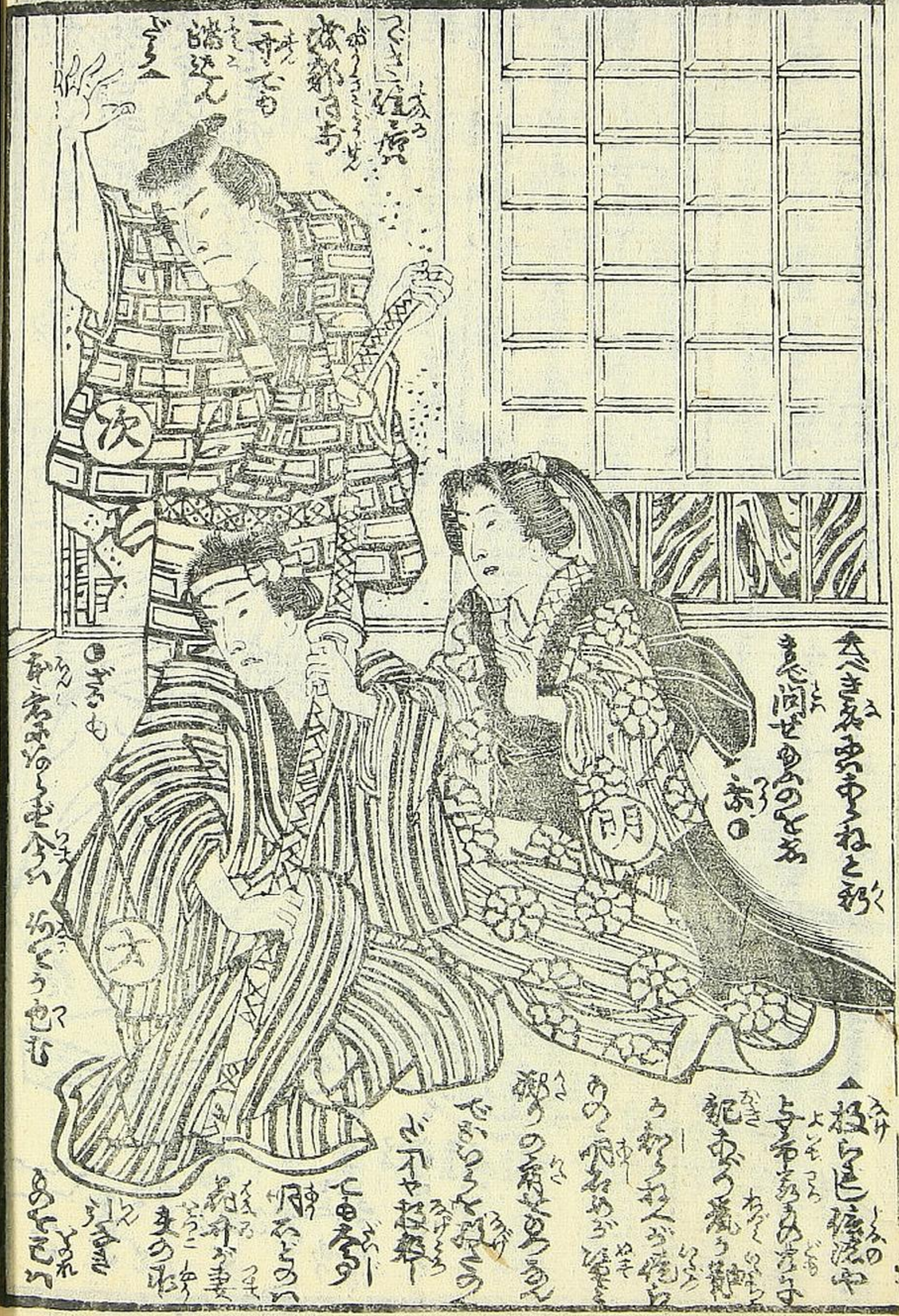
房、多、孫、出

道、お、弟、多、持

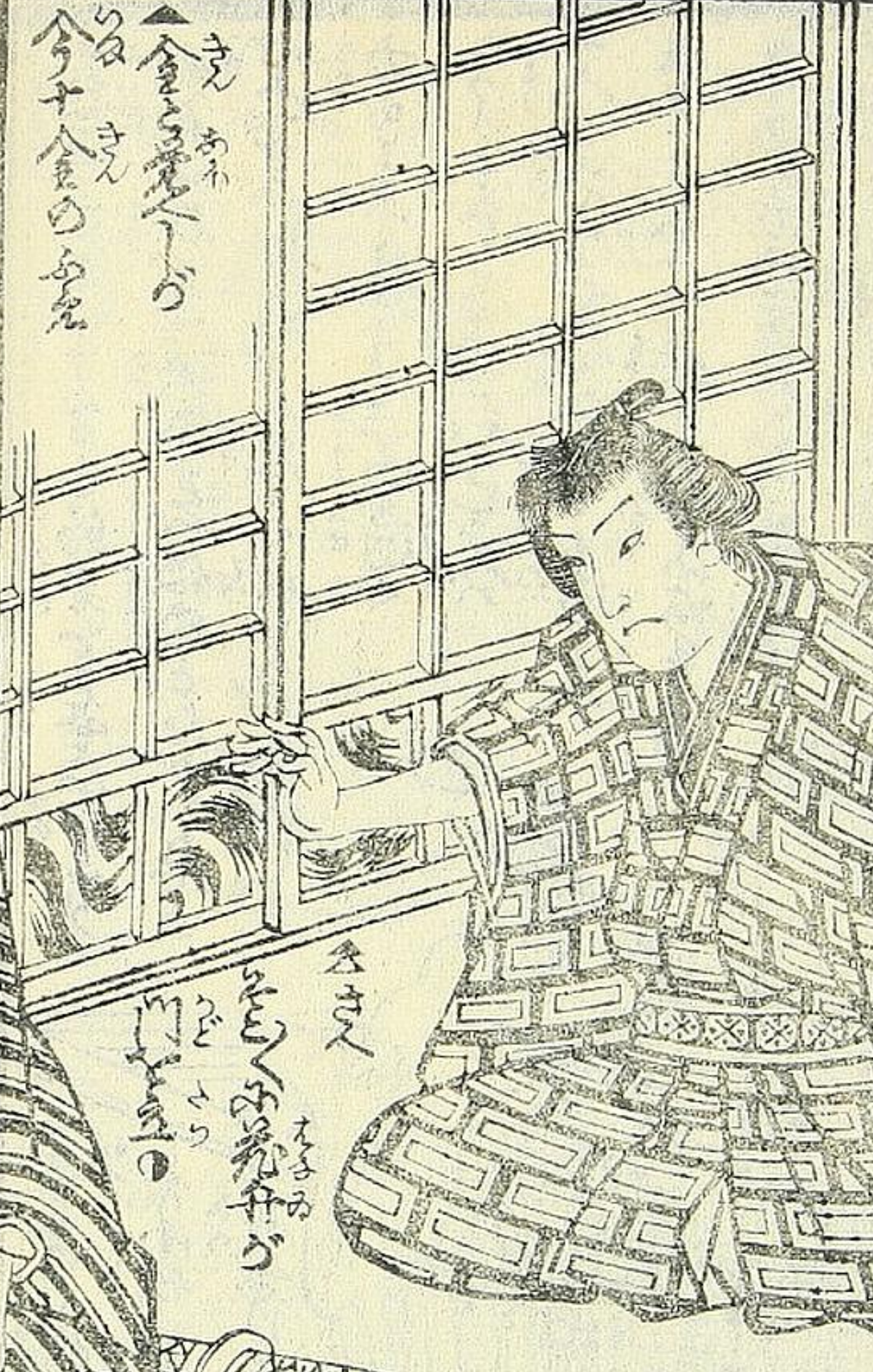
箱、錢

中興... 吾後... 又此... 根津神社... 祿... 押... 志... 守... 氣... 屋... 下... 此... 巻... 是... 正... 著... 房... 多... 孫... 出... 道... お... 弟... 多... 持... 箱... 錢





今更に... 百十... 紅...



大... 船人二世の... 明...

今更に...

百十...

紅...

今更に...

百十...

紅...

今更に...

百十...

紅...

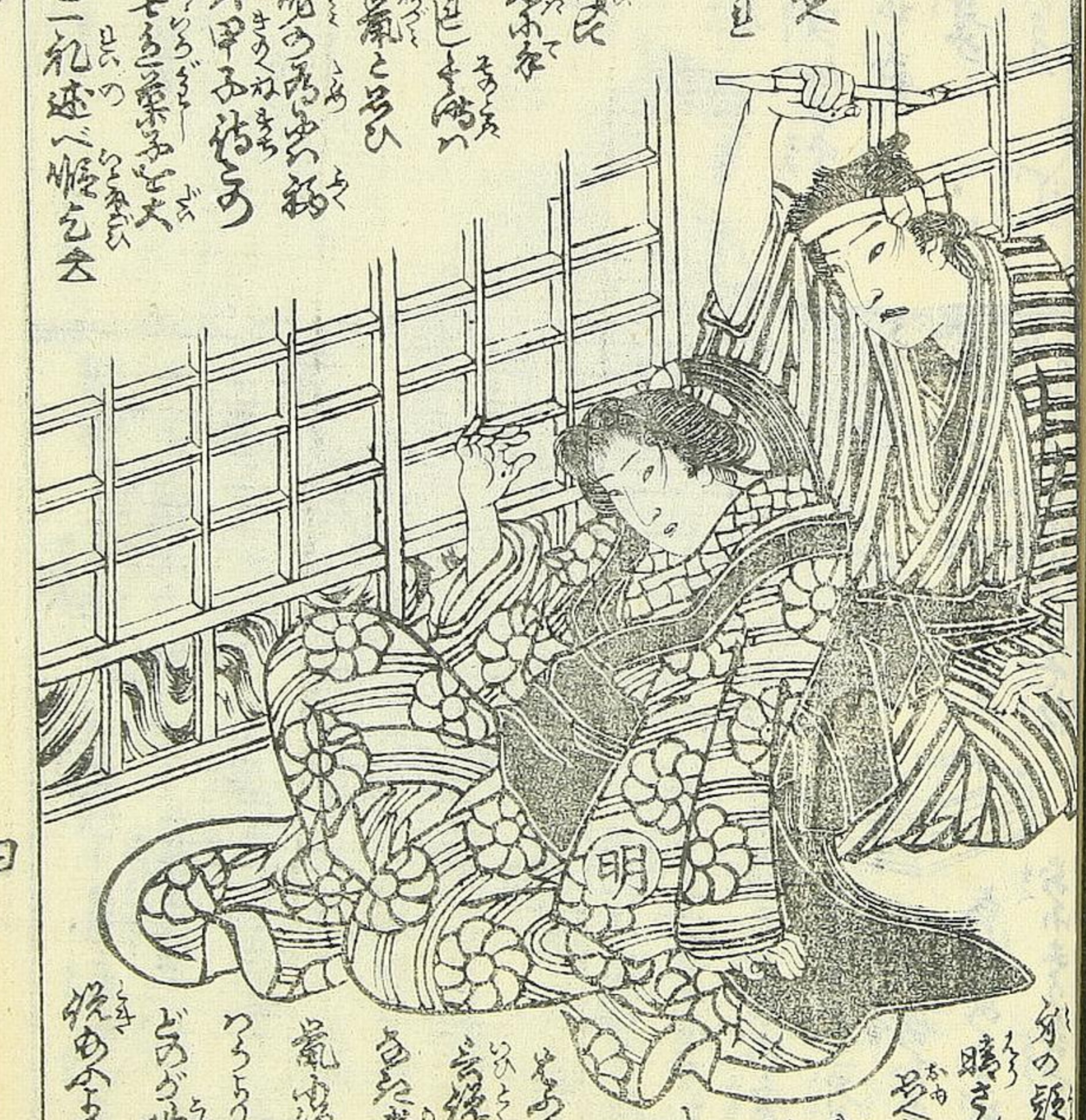
今更に...

百十...

紅...

今更に...

百十...



明... 船人二世の... 明...

つぎ 僕が代りて主人  
女とあつては殺さぬ

△ 僕  
さかや  
侍りやすと  
中をまわらば  
金巻 雑さ  
時ふ明る  
あつては  
けのほを突かす  
侍りては  
月が輝ひたり



あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る

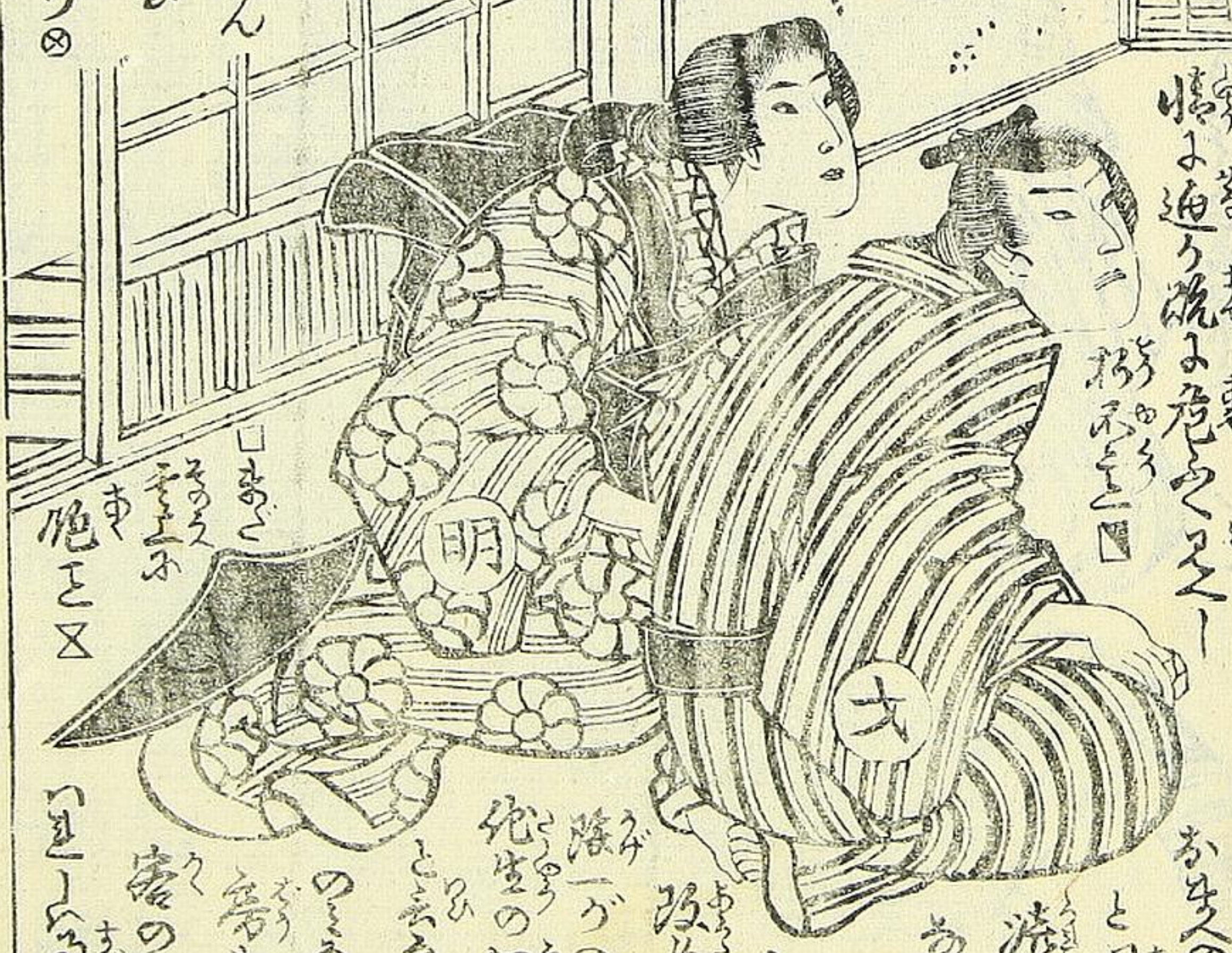
扱ひより 後小治り  
せと 氣小治り  
と 女を殺す

あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る  
あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る  
あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る

清き水にんご

△ 名と替へなつては  
て 明るもの  
業ま珠と  
のちと川竹よ身と

● 沈めてあつても  
大金の良業と  
眼病のやさんと  
俗の松根岩の  
多とエ  
せし方の代金と



情よ 迫り 沈よ 危

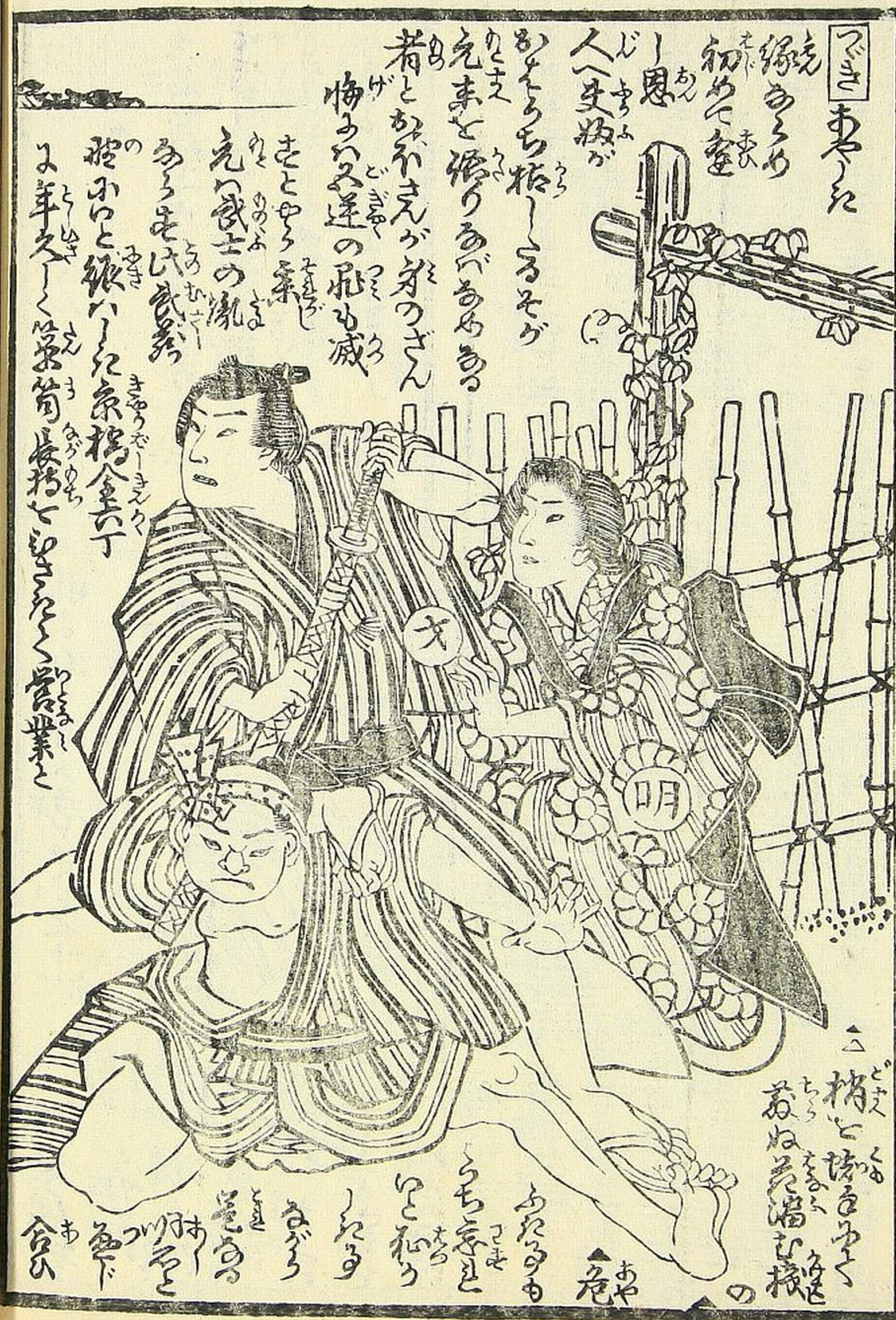
あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る  
あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る  
あつても主場よ  
お合ひ 僕も  
よ君がき  
明る

二  
三  
五

つぎあそび  
縁あり  
初めを

一人の  
人へまぬが

者といふ  
悔む  
先いと  
先いと  
先いと



先いと  
先いと  
先いと  
先いと  
先いと  
先いと  
先いと  
先いと  
先いと  
先いと

二  
三  
五

三  
四  
五



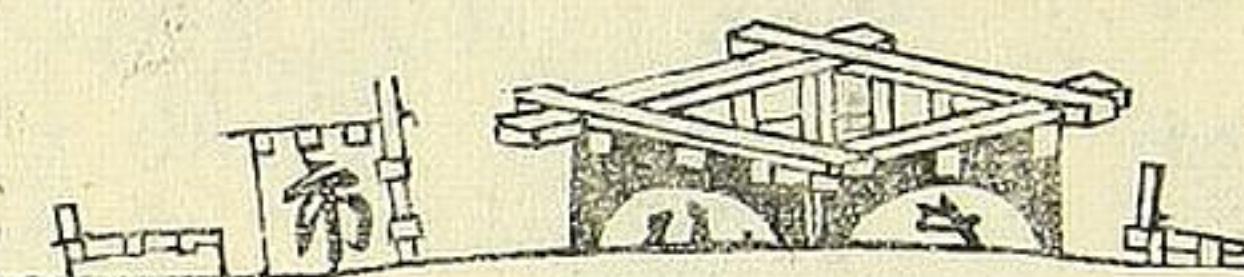
せー相  
どの  
の  
の  
の

情  
送  
あひぬ  
はな  
送  
あひぬ  
はな  
送  
あひぬ  
はな

お  
とけ  
お  
お  
お

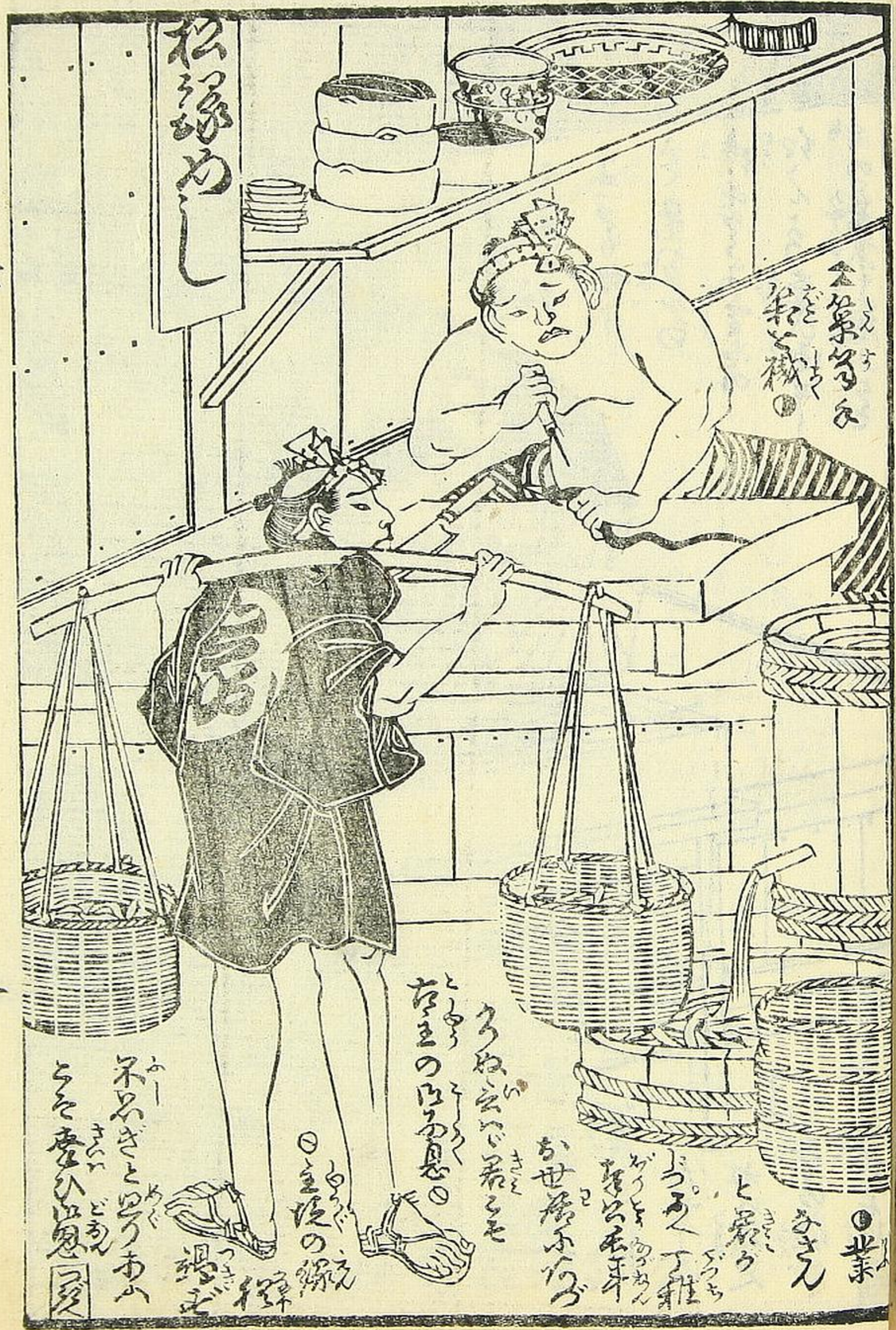
會地  
際  
改  
改

三  
四  
五



つまき 暑くくくくを夏の暖い返り  
 せくせく痛くくや老きたのあら二  
 親小形まては昔芳うけーのもよ  
 へる我身の不幸の飛ちまの界と  
 夫左のいふははひとてさるや夏の  
 病ひも盲目とありしあふれーぬ  
 祿の由免てまて身ひひおふま  
 とも我化の飛の消えぬと悔のふ  
 香懐ままかひも満小体士のける  
 月と君の嵐小形まては昔芳うけー  
 る月の月月ものう押後ういぬる交遊の年  
 の秋分い流うけの晴終まて愛の答へぬ  
 ひし無さうの者ともかくくく空のなる者  
 とそありーが我者ひ小入まてはば救多の室と

葉のいざぬりその情あびー  
 考のこのあふてなりなるう我  
 分がせせー飛科の二人くくの  
 身小形まては昔芳うけー  
 者ともは替まの長なるあう我  
 まる妙命と送りまはし先の飛  
 けがまんとなのうらあふれひと  
 げくくく微小は海見分とや  
 何の浦初なる人の心と  
 一考とまてつづか合受かりひ  
 ありうまてあん方今合の長わ  
 修り小実父と空入相見はれ  
 出ると終せーははひも満小体士の  
 親方我幼あはまてはば救多の室と



木一

松屋

松屋  
米と穀

●葉  
みま  
と  
と  
●葉  
みま  
と  
と  
●葉  
みま  
と  
と  
●葉  
みま  
と  
と  
●葉  
みま  
と  
と  
●葉  
みま  
と  
と









新入二

つぎ 借人教多あつて

有珍翁田の源のやう  
女中腰元お仲居まを

今日をえと息巻とわひどろ  
うづげんいざと知つたは報

風さうよたあよ茶おあし  
あうようゆる一人の非器

姿のまのま柳ふれい書と  
欺むたはよ海家のあを

然とつたこの容類あま  
とらん合候初る極まらう

ろひ安く見くよらう氣か  
傍らつた由との懸るお辞

ろがどく替へてと書とあ

△たじがんの

うちみ思へら  
除せよ多くの物

人もゆきと初まを  
美藤の女子と見せ

世よ母難たはと致  
まよと毛我同本の

多くくの室と手我物と  
多入つとまよと義よ

ちう孫とも小町といふ  
とも傍らぬ揚々の

まよつとつとつとつ  
いふを娘と替

ベきつとたよ

△然とまよと 氣小傷の

仍るよりつて借人よむらひ  
ゆきのは方さぬあるやと

向ひらまはるが関の  
は館桑田家のは息女

あつと知らせふよう  
氣小傷のひそく小娘

その胆の考るは  
ゆまらう一伴この氣

小傷桑田家の氣よ  
つたあつとつとつとつ

次の之編とつてあは

御明治十三年 本所外手丁十七番地  
編輯出版羽田留次郎

# 艶娘毒蛇洲

三編 柳水亭種清作  
楊洲周延画

清業ちのこ

# 草及紙類一代記讀切本類品々

一袋 二袋 三袋

## 事情明治太平記

村井静馬著 伏見より熊本秋に至る十五編  
鮮齋永濯画 十六編より鹿兒島に至る

○初編ハ伏見戦争を始めとして上野東叡山焼討り其外  
御一新以来の事情明細に記を居る多し人情開化一目あるや  
に平が各付繪入りで婦女子も解しゆまく綴りし書あり

書肆 問屋 地本

東京日本橋通三丁目十三番地  
延壽堂 屋 小林鉄次郎版元

